

危機を脱した世界遺産

第3回 カトマンズの谷

ネパール / カトマンズ、バクタプル郡、ラリトプル郡
登録基準 iii iv vi 1979年登録

標高1,300m、東西25km・南北20kmにわたるカトマンズ盆地の中に「カトマンズの谷」はある。1979年に、カトマンズ、バタン、バクタプルという3つの古都と、4つのヒンドゥー教および仏教の建造物群が世界文化遺産に登録されており、レンガと木材を巧みに組み合わせた建築技法や精緻な彫刻に独特の様式がみられる。

1990年以降、ネパールでは東西冷戦の終結を背景に民主化運動が隆盛し、地方分権が進んだ。同時に地方から首都カトマンズを目指して出稼ぎ農民が押し寄せ、人口の過密化が深刻となった。カトマンズは無制約な都市開発によって景観が急激に変貌、歴史的建造物や都市構造が失われてゆくと同時に、慢性的な自動車渋滞による排ガス汚染が進んだ。かつて神々の棲む街と呼ばれたカトマンズは、見る影もなく荒廃した。

これを受け、ユネスコ世界遺産会議で最初に危機リスト登録を示唆されたのが1993年であった。建造物の破壊および景観破壊の要因として、文化財保護に関する法制度の弱さと保護政策の機能不足が指摘された。その後、ほぼ毎年危機リストへの記載の検討が議題に上るものの、ネパール当局の強い要望もあり、危機リストへの記載は2003年まで引き伸ばされた。その間に漸次的に失われた建造物の数、変貌した景観を目の当たりにすれば、あまりに遅すぎた決断であったと云えよう。

しかし、カトマンズが世界遺産に登録された当初のオペレーショナル・ガイドラインをみると、バッファゾーン策定の義務



カトマンズの
ダンパール広場



パタンのダンパール広場

写真提供：C&K Nepal



写真提供：ネパール大使館

カトマンズ盆地全景

や利用の制約が明記されておらず、景観を一体的に保護するための防護壁となる基準がそもそも存在していなかったという不幸があったこともまた一方で事実である。

2007年の世界遺産会議でネパール政府はカトマンズの谷における取組みを以下のように報告した。まず国家規模でカトマンズの保護に関するマネジメントガイドラインを策定するとともに、エリア全体を一連の景観として保護するために規制を改訂した。また、各歴史的建造物とそれぞれの保護等級のデータベース化を徹底した。地域においては、各物件のマネジメント責任者（所有者であることが多い）を定め、保護活動と情報共有のための委員会の定期開催を義務付けるなど、国家が中心となり自治体と物件の所有者とを巻き込んだ体制作りが進められた。なお、国際支援を受けて、コアゾーン及びバッファゾーンにおける建築物は新規ガイドラインに則って修景が終了したとの報告もなされた。これらの取組みが評価され、カトマンズの谷は2007年危機リストから脱した。

アルペロベッロやサフランボルなど、人々の生活とともにある「街並み遺産」の保護は、常に近代化の波や人の流動との摩擦の中で行われてきた。それは、街並み遺産の宿命であるとも言える。近代化や観光に抗うのではなく、自然でコンテンポラリーな生活とともにある街並み遺産。カトマンズがそれを体現できる日も遠くはない。

執筆者プロフィール

河野まゆ子

東京大学文学部美術史学専攻卒業。旅行業界を経て、筑波大学大学院にて奈良県・和歌山県における文化的観光施策の現状を研究、世界遺産学修士を取得。現在は、株式会社ツーリズム・マーケティング研究所にて国内・海外旅行のマーケット分析を行う。



AIU保険会社
エイアイユー インシュアランス カンパニー
A Member of American
International Group, Inc. **AIU**

〒100-8234 東京都千代田区丸の内1-1-3
旅行保険カスタマー・センター
03-5611-0799
www.aiu.co.jp/travel

AIU保険会社は、
世界遺産アカデミーの活動を
応援しています。



この印刷物は大豆油インキ
を使用しています